平成7年8月18日

～"中学生の広島体験学習"
３８名の中学生が東京駅を出発～

１８日午前８時、区立中学校(13校)２年生の代表生徒３８名（男子１７名、女子２１名）等総勢５２名の一行が、１９日までの１泊２日の行程で広島市に向けて出発した。

これは「原爆被災都市広島を実際に見聞する機会を持ち、平和の尊さを認識するとともに、自分自身の人間としての生き方について関心を高め、社会の一員としてよりよく生きようとする態度を身につける」ことを目的に区教育委員会が平成３年度から実施している事業で今年で５回目。

生徒たちは７月から資料を集めたり、担任の教師やクラスメート等にアンケートを取るなどして、「原爆の特性」、「広島市の被害状況」等各自課題を設定し事前学習を重ねてきた。また、慰霊碑に供えるため全校生徒により折られた千羽鶴を用意した生徒もいる。この体験学習の成果は１０月頃に各学校で行われる文化祭等を通しての報告会で発表される。

１８日午後から、各自課題にそって原爆ドーム、平和記念資料館、原爆慰霊碑等を見学する。平和公園を訪れている外国人や市民の人たちにインタビューをする予定の生徒もいるという。

また今回初めて、爆心地に最も近い学校として大きな被害を受けた本川(ほんかわ)小学校（笹村尚志校長）で原爆投下当時の学校の被害状況、児童たちの生活の様子等の話を聞くことになっている。ちなみに、当時在校していた児童で奇跡的に生存されているのは２名だけとのこと。

１９日は平和文化センターで、本川小学校校長の父であり当時市内の舟入国民学校の教頭を務められた語りべの笹村弘志さんによる『平和の尊さと人間としての生き方について ― 広島原爆被災をとおして ― 』と題した講演を聞くことになっている。昨年の体験学習の際も同氏の講演があり、その時参加した生徒が書いた作文の中に、～「自分は原爆投下時、小学校の教頭で、被爆した児童が、何日たっても親がむかえに来ず『お母さん、お母さん』といって死んでいった。その子たちの命をあなた方、一人ひとりが東京へ持って帰ってください。そしてその分もがんばって生きてください」という最後に話されたお願いの言葉が、体験学習のなかで一番印象に残った～という文がある。今回引率を担当される杉原指導主事は「この作文をよんで涙が止まらなかった。今年の講演も特にお願いをして笹川さんに講師になっていただきました。講演を通して、生徒たちが平和の尊さを思い、人間としての生き方に関心を持ってもらえれば」と話していた。

― 次頁へ続く ―

今回の体験学習も多くの生徒の参加希望があった。
「戦後５０年の節目として、是非学習したかった。まだ後遺症を持った人たちが大勢いるのに、核実験が行われていることに憤りを感じます」と話す女子生徒や、「もし選ばれなくても、広島に家族旅行をすればいいじゃない」と親に言われたが、「家族でいくのでは意味がない。友達と一緒に考え学ぶことに意義があるんだ。と言い返した」と話してくれた男子生徒。代表となったことで、真剣に事前学習に取り組んできている生徒たちの体験学習に寄せる強い思いが感じられた。

・詳細　教育委員会指導室